

---

# 幻想のアルカナ

名無しの権兵衛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想のアルカナ

### 【Nコード】

N9109Y

### 【作者名】

名無しの権兵衛

### 【あらすじ】

最強冷酷、クー&ヤンデレ属性のヒロインがとにかく暴れる物語。チート、ハーレム要素あり、また厨二という単語にピンときた方はぜひいらしてください。

痛々しいくらいの厨二をお送りしますので。

魔術師 それは己が願い、祈りを顕す術を会得した者らの総称。

彼らは己が願望を成就させるためならば如何な犠牲をも厭わず、何ものをも顧みない。彼らはそういう存在であるがゆえに。

物語は、死神の少女が帰参した時より動き出す。道化の少年との再

会、不老不死の蛇との邂逅は、果たして彼女に何をもたらすのか。  
これは異端者と蔑まれた魔術師たちの、幻想の物語

一月三日、祝一万アクセス！まだまだ序盤だというのに、皆さん  
どうもありがとうございます。今後ともよろしく願います。>

――）<

## 第一話

人生において、人がもつとも輝きを放つ瞬間とは、やはり死する刹那だろう。

たとえば、重篤じゅうとくな病を患い余命いくばくもない人間がここにいたとする。そんな人間が、己が運命に悲憤慷慨ひふんこうがいするのではなく、懸命に生きて　そして逝く様は多くの人々に感動を与えるのではあるまいか。否とは言えまい。事実そのような人間を題材とした物語は数多く存在するのだから。

限られた時間を生きるからこそ、その死は美麗あわじなものとなる。そしてそれは、物語の中でのみ通用する概念ではない。現実でも、立派に生き諸人を魅了した偉人たちは数多くいよう。人々の生きる指針となった者らは幾多といよう。

であれば、やはり死は美しい。

そう思うのに、この時世、それを見る機会は極端に限られている。特にこの平和ぼけた日本という国にいるのなら、なおさら。

ゆえに、彼女　比良坂黄泉ひりさかきよみは、いままさに死に吞まれかけんとしている者に手を差し延べはしなかった。

「あ、がつ……た、頼む……助けて、痛いんだよ……っ」  
眼下から、呻吟しんげんと懇願が入り混じった声が聞こえてくる。

冷たい地に伏しているのは、二〇歳そこらの青年。一体何があつたのか、全身傷だらけで血に塗まみれている。トラックにでも轢ひかれたのだろうか。

そんなことを思いながら、黄泉はガードレールに腰かけ先程向かいにある自販機で購入したコーヒを一口。青年の必死の願いにも、まるで意に介していない。ただその深淵こくどのような無感情の黒瞳で彼を見下ろしている。

「は、あ……誰か、助けて………」

もはや彼女にどれだけ乞うても無駄と判じたのか、青年は他の者に救済を願い始めた。が、時刻はとうに零時を過ぎている。加え、最近この街 御門市みかとしでは無差別連続殺人という物騒極まりない事件が頻発ひんぱつしており、死体が発見されていないだけの行方不明者も大数出ている。ゆえ、人氣が失せたこのような時間に出かける者などほぼ皆無だ。

「ああ……」

と、そこで黄泉は思い至ったように。

「おまえ、例の殺人鬼にやられたのか？ 災難だったな」

まさに他人事のように訊ねた。

しかし青年は、弱々しく首を横に振って。

「ば、化物、に……」

とそう返答してきた。

化物。化物？ と黄泉は小首を傾げる。目睫の青年は、件の殺人鬼は人間ではないと言うのだ。だが、なるほど最初の事件から一月経ったいまもまるで警察が成果を挙げられていないのは、そういう理由からだったのか。

「へえ…… 化物が相手じゃ、警察も大変だな」

どうでもよさそうな口調で呟く黄泉。けれど、彼女とてこの街にいる以上いつ襲われるやも知れない身だ、決して他人事ではない。が、それでも黄泉は動じない。殺人鬼・化物が潜む街。時刻はそれらが活発になりそうな闇の時間。そしてそれらに襲われたという瀕死の青年が一人。そんな常人ならば恐怖でパニックに陥りそうな状況に立たされているというのに、微塵も心を乱さないのは一体どういうことなのか。

それは言うまでもなく瞭然。

彼女が死を是とし、美と認識しているから。ゆえ、恐怖という感情が無いのだ。

端的に言ってしまうえば、人として壊れている。つまり異常者というやつだ。そんな人間に共感を求めても徒勞に終わるだけ。

この青年が不運だと言うのなら、化物に遭遇してしまったことより、後に出逢ったのがこの生粋の死神たる彼女だったことがそうだろう。他の誰かならば、助かるかどうかは別としても、救うために動いてくれたらうに。

「あ、は……づつ」

ゴボ、と口から血の泡が零れ出る。もはや彼の死は秒読み態勢に入ったと、医学知識のない素人の黄泉ですら容易に見て取れた。

しかしやはり黄泉は何もしない。ただただ苦しむ青年を観察観賞するように見ている。もはや彼に救いなどないだろう。もう半刻と持たぬだろうが、その最期の時まで嘆き続けるしかない。ああ、もしも霊というものが世に存在するのだとしたら、こうした者がそくなるのだろう。

だが、運命の悪戯か、あるいは神の慈悲か、奇跡は起こった。

「ん？」

サイレンの音が遠くから聞こえてくる。しかもその音がこちらへ近づいてくる。偶然、ではないだろう。ここには化物に襲われた負傷者がいる。その事件をどうやってか知ったとなれば、警察が黙っているはずがない。

黄泉はぐいっと一気にコーヒーを飲み干し、向かいに設置されている自販機、その隣に置いてあるゴミ箱へ缶を投げ入れて。

「じゃあ、私は行くよ。達者でな」

腰を上げ、その場から離れる。別段やましいことなどないのだが、事情聴取だの何だのと警察に拘束されるのは御免だ。面倒臭い。

「あ……ぐ、あ……ま、待つ」

去り際、微かに聞こえていた呻き声が唐突に止んだ。

それでも、彼女は振り返らなかった。

瀕死の青年がいた場所から道なりに一〇数分歩いたが、その間誰一人として見かけることはなかった。街は凍りついたように静まり返り、悄然とした空気が満ちている。まさに死の街そのものの様相

を呈ていしていると言えよう。

(……化物、か)

不意に黄泉は胸中でごちた。

あの青年は言っていた。化物に襲われたと。

普通に考えれば、重傷を負い錯乱していたがゆえの妄言　そう取るのが自然だろう。人は未知なるものを求めながら、自分に害する未知だけは頑なに認めようとしなない生き物だから。

それは恐怖から生じた感情。誰もが持つ自衛の願望うんぼう。しかし、前述の通り彼女にはそのような感情ものが無い。ゆえに、信じたとまではいかないまでも、頭ごなしに否定してはいなかった。というより、どちらでもいい、どうでもいいと思っっている。そんなものになど、比良坂黄泉は微塵の興味もないから。

彼女が関心を持つのは、たった一つだけ。

しかし、その願望は人類という種の大半に受け入れられないもの。ゆえに、彼女は常に無聊むらうしていた。特にここ一〇年はそうだ。誰一人として、彼女の存在を認可した者はいなかった。いや、一〇年では済まない。比良坂黄泉という人間が生まれて一八年、その間彼女の存在を認めたのは、たった一人の少年だけだ。

実は彼女、一度この街からちよつとした事情で離郷しており、そして帰郷したのがつい一月半ほど前。つまり、ちょうど彼女が戻った直後辺りに、この連続殺人が起こり始めたのだ。不幸と言え、不幸だろう。彼女は特に何も感じていないが。

ともあれ、事件が起きてなお彼女がこのように出歩いているのは、一〇年前唯一彼女を認め、そしてその在り方に共感し合えた少年を探しているがゆえ。

だが、一〇年振りに帰郷し、いの一番に彼が当時住んでいた自宅へ訪れてみれば、そこには別の家族が住んでいて、当の本人は未だ行方知れず。もしかしたらもうこの街にはいないのかもしれないというより、家を売り払っかっていることを考えれば、そうと考えるのが自然だろう。

しかし、それでも彼女は探していた。別に彼に恋慕れんぼしていたわけではないが、会えるものなら会いたいと思っっている。

「……あいつは、どこにいるんだらうな」

そして何をしているのか。

一〇年前の彼ならば、いま街を騒がせている殺人鬼にも恐れず関わろうとするだろう。あの少年はそういう怯懦きんじうたとは無縁の、危険嗜好の性質を持っていた。ゆえに、黄泉は敢えて殺人鬼が動き出しそうな夜間の散策を行っているのだが　結果はご覧の通り。さすがに辟易へきえきしてしまう。

さて。今宵はもうこの辺りで散策を終えようかと黄泉が考え始めていると、不意に何処からか獣の絶叫にも似た咆哮と、そして甲高い金属音が聞こえてきた。

「……………」

脳裏に先の青年の言葉が蘇る。化物に襲われたと、瀕死の重傷を負いながら紡いだ彼の必死の訴えが。

音源はここからそう遠くない。つまりこの付近に異常が在るということ。それを察したならば、直ちに逃げるが道理だろう。余程の痴愚でもない限り、そう判断を下すはず。が、しかし黄泉はその選択を取らなかった。

理由は一つ。

ヒマ潰し　それである。

同じことの繰り返しはさすがに飽いてしまう。たまには別の刺激も欲しい。そんな理由で、彼女は黄泉路の如き道に行くこととした。

もはや愚かと言うにもおこがましい、極大の異常者の思考である。急ぐでもなく、躊躇うでもなく、自然な足取りで黄泉は狂気の源泉へ進んでいく。気のせいかわ、先程まで何でもなかった空気が、突如として冷たく感じられた。しかしそれは別段気温が急激に下がったのではない。似て非なる全く別のもの。そしてそれに、彼女は覚えがあった。　否、慣れ親しんだものだった。

錯覚ではない。もうすぐそこに、それがある。

そして、開けた街路の角を曲がった瞬間　予想通りの異常が比良坂黄泉を出迎えた。

最初に目に入ったのは、毒々しいほどに黒々とした体表の、筋骨隆々たる　化物。鋭い爪牙と、そして頭部から生えている二本の角らしきものを見るに、あれは鬼の類だろうか。兎にも角にも、まづ人間でないことだけは確かである。

そんなものが世に実在するというだけで、まず常人からすれば驚天動地の事実なのだが、さらにもう一点、驚愕すべき事柄がそこにあった。

人間。

見るからに異常極まりない姿形をしている鬼と相對しているのは、どうということはない平凡な身なりをした二〇歳そこいらの男だった。

ただ一つ　その手に剣を有していることを除いて。

剣戟音が闇夜に木霊する。

鏡合わせのように間断なく衝突し火花を散らす剣と爪は、すなわち互いの腕力が互角であることを示している。だがそれはおかしいだろう。鬼の力はアスファルトすら砕いてしまうのだ、この時点で人の域を越えている。にも拘らず、両者は幾度もぶつかり合い双方弾かれている。ならば特異なのは鬼ではなくこの男の方。

西洋風の両刃剣を揮い鬼と対等の戦をしている彼の動きは、なるほど鬼と競れるだけあって人間離れしている。運動神経が良いとか、特殊な体術を身に付けているとか、そんな生易しい話ではない。そもそもその基本性能が、人の限界を越えているのだ。

何の器具も無しに五メートル近くも跳び、ビルの壁に体がめり込んでも口々に傷を負わない。ああ、つまりあの男は見かけは人間だが、その実この鬼と大して変わらぬ人外なのだ。ゆえに、これは異形の怪物共の喰らい合い。であれば五分の勝負も納得のいくところとは、まず思えまい。全うに生きてきた者ならば。

第一に茫然、第二に動揺、第三に現実逃避　それが自然であり

正常な反応だ。ならば、この怪奇的な場面に遭遇してなお心乱さず平然と始終を観ていられる彼女は、さて、一体何なのだろうか。

「……………」  
鬼と男が繰り広げる激烈な戦いを、黄泉は逃げることも震えることもなく、ただ道路の脇に停めてあつた車に体を預けて観賞していた。依然としてその顔に恐怖の色はない。いや、それはともかくとしても、この尋常ならざる光景を見ても眉一つ動かさないのはどうということなのか。

それは明瞭。

彼女が、彼らの正体を知っているからに他ならない。

「滓鬼<sup>しき</sup>、か……………なるほど、件の殺人鬼の正体は魔術師<sup>マジシャン</sup>ってわけだ」  
ちよつとした謎を解き明かした子供のようなしたり顔を浮かべる黄泉。すなわちそれは、彼女にとつては彼らなどその程度の存在でしかないということ。ゆえに畏怖<sup>おそ</sup>などあり得ず、無聊<sup>むりよう</sup>を紛らわせるにはちょうどいいという認識しか持っていない。

つまりは玩具　人外の鬼も、人間離れた男も、黄泉からすれば等しく己を楽しませる玩弄物<sup>ワンリヤクモノ</sup>でしかないのだ。もし仮にこの場に第三者がいたとするならば、いまなお凄烈な殺し合いを続けている人外の者らと彼女、果たしてどちらを化物と呼んだであろうか。

男が後方に飛び退き、鬼と距離を取る。

それが撤退のためでないことは、男の両の瞳を見れば瞭然<sup>りょうぜん</sup>だろう。彼は臆<sup>おそ</sup>してなどいない。それどころかむしろ、勝利を確信しているかのように笑みさえ浮かべている。

彼我の距離は目算一〇メートル。

その開きを埋めんと、鬼は咆哮<sup>ほうごう</sup>を轟かせて突貫する。それはさながら巨大岩石の轟進<sup>ほうしん</sup>。ゆえに、人間の柔な体であれを食らえばひとたまりもない。ただ惨<sup>あつ</sup>たらしい轢殺<sup>れきさつ</sup>死体と化するのみ。  
だが。

男がその言霊を紡いだ瞬間  
に勝敗は決した。

膠着していた戦況は激変し、ここ

## 第二話

魔術師とは、狂おしく求めてやまない己が願い、祈りを顕す魔術なる術を会得した者らの総称。ああ、それは信仰によって奇跡を為す祈禱師きとうしと酷似した能力と言えるだろう。だが唯一にして決定的に異なる点は、彼らが神や精霊などという絶対の上位者を信奉するのではなく、ただ己の至上性のみを信ずる狂信者であることだ。

世界かみが敷いた法など知らぬ。この己れが定めた法理こそ至高それが彼らの共通認識。ゆえに、魔の術を揮う者と彼らは呼ばれている。

そして、その異端者がここに一人

「ブラベウス・ディケ  
不浄断罪」

その魔言まごんを紡いだ刹那、阿守正一あもりせいいちの所持していた剣が淡い光を帯びていく。それもただの光ではない。どこまでも澄んだ、靈妙なる聖光せいこう。

「グ、ウ……ッ」

鬼が呻く。その腹部には正一が放った剣が突き刺さっていた。本来ならば、鬼相手にこの程度の傷を与えたところで大した意味はない。鬼の生命力は人のそれとは比較にならず、殺すには頭を潰すか首を刎ねるか、あるいは体を切り刻むしかないのだ。にも拘わらずこうして鬼が呻吟しんげんしているのは、やはり彼の持つ剣 正確にはその光が起因となっているのだろう。

古来よりこの街を守護している《阿守》の血族は、生まれながら『正義』という願望をその身に宿している。それは正一も例外ではなく、ゆえにその願望の発露は、自然と世の害悪の象徴たる魔性にとって天敵となり得るのだ。

このように。

声無き声で絶叫する鬼。その鋼の如き身体は沸騰したかのように泡立ち、霧状となつて崩壊していく。反撃などできはしない。そのようなことを狙つて行えるほど冷静ではいられず、且つ放つ力もない。

如何な暗闇も光に当てられれば消えるが如く、破邪の力の前には如何な魔性も無力なのだ。

そうして、鬼が完全に消滅するのを確認した正一は、手にしている剣　幻装具げんそうぐと呼ばれるそれを体内もとに還し、一息吐く。

最近頻繁に起こっている殺人事件、あれが魔術師の仕業と知つた阿守は、毎夜こうして街を巡回し人々に害為す魔術師を探しているのだ。その過程で此度のような人外魔性の悪鬼と遭遇するのはこれが初めてではなかつた。腕の立つ魔術師は、己が願望を他者に植え付けることで使い魔とすることができるのである。つまり先程の鬼がそれ。と言つてもあれは滓鬼しきというもので、名の通り主君の魔術の残滓によつて構成された低級鬼でしかないのだが。

問題なのは、主の残滓でしかない滓鬼如きが、この己と真つ向から戦えるほどの力を有していたということ。別段驕っているわけではないのだが、しかし自他共に阿守正一という魔術師の実力は一族内でも上位にあると認められている。

だというのに。

「滓鬼でこれか……なら主は一体どれほどの力を……」

考えるだけでも気が重くなる。これまでにも幾度か魔術師が来訪し悪逆の限りを尽くしたことはあつたが、しかしここまでではなかつた。滓鬼も、腕一本動けば倒せる程度で、少なくとも幻装具の能力を解放しなければならぬような事態に陥ることはなかつた。

ゆえにこれは過去最大。空前の敵がいまこの街のどこかに潜伏している。それはもう歴然。早急に帰還し当主他一族の者らと策を練らねばならない。

正一がそうと決を下し、踵を返してこの場を去ろうとしたところで。

目を見開き、歩くことも忘れて硬直した。

彼が向ける視線の先　そこには一人の少女がいた。

その少女は停車された車に身を預け、弛緩しているような体勢でこちらに目を向けている。まずそこからして異常だろう。殺人事件が頻発し皆が震えている中深夜に道遥じゆじゆし　それだけならばまあ愚かな命知らずというだけで済む話だが、彼女は滓鬼との戦いを観ていたのだ。にも拘わらず何の反応も見せていない。ヒマ潰し程度にストリートパフォーマンスを眺めていたかのように、ただ冷然として  
いる。

何とも不気味極まりない少女だが、けれど正一が吃驚おどろしている理由はこれではない。彼を驚愕せしめた真なる理由は、その少女が一体誰であるか、それが分かったから。

正一が問う。

「お前……黄泉、か？　比良坂黄泉だよな？……何で、どうしてここに……っ」

その質疑は、無垢な幼子でも見て取れるほど焦燥　否、恐慌の念を表していた。人外の鬼と相對しても毛ほども心を揺るがせなかつた彼が、己より一〇近く年下の、それも脆弱な女風情に慄い（おの）ているのだ。

只事ではないだろう。

事実その通り、正一はこの街に潜む強大な力を持っている魔術師のことなどより、彼女の方が遙かに脅威と考えていた。

身なりは黒いジャケットと黒いジーンズという黒づくめの出で立ち。容姿は癖のない真っ直ぐな濡れ羽色の髪に深淵のような黒瞳くろとま、端麗に過ぎるその顔立ちはまさに仙姿玉質せんしきよくしつと言えるが、しかしその実美の要素をただ詰め込んだだけの精巧な人形のような、何とも不気味なもの。しかし正一が恐怖しているのは外見的な恐ろしさではなく、そもそもの根本。比良坂黄泉という存在そのものに対して、彼は絶対的な畏怖を覚えているのだ。

その何を差し置いても忌避すべき存在モが、いま口を開く。

「……ああ、正一か。すっかり大きくなって、初め誰だかわからなかったよ」

それは予想に反してどうということのない、極めて平凡な言葉だった。

こうして彼女と正一が顔を合わせるの、約一〇年振りだ。ゆえに一目で相手がそいつだと見抜くのは至難だろう。黄泉が最初誰だか分からなかったというのも頷ける。しかし、正一は一瞬でそうと看破していた。

なぜか。

理由は至極単純。こんな死の塊のような存在は、世に二人としていないから。

「なぜ、戻ってきた？」

震える己が心を悟られまいと呼吸に気をやりながら、正一が訊ねる。

それに黄泉は、何を言っているのかとばかりに怪訝けげんな顔で。

「生まれ育った街に帰ってくるのに、何か理由があるのか？」

「いる」

間髪入れずに正一は言った。

他の誰かならば、彼女の言った通り疑問に思う必要もないだろう。だが比良坂黄泉という少女だけは例外なのだ。なぜなら

「貴様はこの街から追放された身だろう？ 我ら阿守の一族によって」

ゆえに、帰郷などあり得ない。当時の正一はまだ一〇代半ばの子供だったためその現場に居合わせなかったが、しかし父や当主からはそう聞いている。二度とこの街に現れることなどないだろうと。

「にも拘らずどうして戻ってきた？ 誰がそれを許した？ 貴様の存在など、この街にとって いや、世界にとって害悪でしかないということ未だ理解していないのか！？」

知らず声を荒げていた。

怒りが恐怖の感情をねじ伏せたのだ。

しかし、対する黄泉は微塵も動じず。

「大袈裟だな、おまえは。そんな気にすることでもないだろうに」  
「く……っ」

その的外れな発言に、危うく理性が焼き切れそうになる。この少女は一〇年の歳月をかけてもまるで理解していないのだ。己れが人類の癌であるということ。

であれば、次の彼の行動は至極当然と言えるだろう。

「ブラベウス・ディケ  
不浄断罪ッ！！」

幻装具の召喚・能力解放を行い、正一は切っ先を黄泉に突きつけて。

「阿守の屋敷に來い。そこで貴様を罰する。否と言うのなら、容赦はしない。ここで俺が貴様を斬る」

劍の柄を強く握り締め、ありつただけの殺意を叩きつける。それは人外の魔性でさえ平靜ではいられないほど強く鋭いものだったが、しかし彼女はどこ吹く風、泰然自若に佇立している。

不意に、胸中に押し潰したはずの恐怖が再び湧いてきた。それは本能からの警告。自衛という己が身を守るための、撤退の指示サインだが、正一はそれらを全て払いのけ。

「分かった。ならば力づくで従わせるまでだっ！」

地を蹴り、飛翔の如く疾駆。彼我の距離およそ五メートル強を一秒足らずで埋め、行動不能にすべく足を斬りつける、その刹那の直前

「むげんかいり  
無間乖離」

比良坂黄泉は、死の言霊おわりを紡いでいた。

「なっ」

驚愕は唐突。後の絶句は当然。

何しろ阿守正一の幻装具が、微塵となって切り刻まれていたのだ

から。

幻装具とは、術者の真正アルカナ魔術から派生した魔術によって編まれた  
武具のことである。ゆえに、結論から言えばこのように破壊されよ  
うとも修復は可能だ。それこそ何度でも。

だが、幻装具を生み出す者は、当然ながらその武具を世界最高硬  
度のものと設定している。事実としてそうであるかどうかはこの際  
問題ではない。肝要なのは術者がそうと信じているかどうかだ。

しかし、現実として壊れないものなどない。他の魔術師の幻装具  
も世界最高硬度であるのなら、必然的にどちらかが似非ということ  
になる。そして重ねて言うが、幻装具とは武具に非ず、魔術 形  
成された術者の意志そのものである。

つまり、それを破壊されるということとは

「あ、が、あああああああああああああああああああああああ  
ああああ ツツ！！」

絶叫。

喉が張り裂けんばかりの叫喚が暗天の空に響き渡る。

地に放り出された魚のように乱雑に四肢をバタつかせ、激しく悶  
える正一。いま彼を責め苛んでいる苦痛は、全神経を擦り潰された  
が如く筆舌に尽くし難いものだった。

ああ、いつそ意識を失えればどれだけ楽だろうか。しかし皮肉な  
ことに、物理法則すら超越する強靱な意志力を持つ魔術師であるか  
らこそ、そうは容易く意識を失うことはなかった。

「は、あ、づつ……」

灼熱の如く激痛に明滅する視界の中で、正一はそれを見た。

蛍のように淡く儂い光を発する花卉 のようなもの。幻想的で  
神秘的で、ただただ美しいとしか言えないその白光は、しかし視界  
を埋め尽くすほどあればそれも反転しよう。不気味で恐ろしい

さながら数多の死神が中空を旋回しているような、そんな悍おそまし  
き光景。それが、正一の頭上に広がっているのだ。

「あ、あ……」

この時、改めて彼は恐怖した。心底。

闇を塗り潰すように展開されているこれらは、言うまでもなく比良坂黄泉の幻装具だ。それは分かる。分かるが 何だ、これは？ 花卉一枚の大きさはせいぜいが一、二センチ程度。しかし一枚だけで、すでに阿守正一の幻装具それを遙かに凌駕する強度と切れ味を有している。なまじ彼も一流の魔術師であるだけに、それが分かった。そして、その花卉がいま何百何千万と中空を浮遊しているのだ、これを見て気を強く持てる者などまずいまい。格が違うなどという生温い次元ではなく、文字通り力の桁が違っているのだから。

もはや正一は顔を上げることできなかつた。それは痛みからではない。ただ怖かつたから。恐ろしかつたから。だから、ただ去るのを待った。震えながら。

やがて、この場を去る足音を聴覚は拾ったが、それが聞こえなくなっても、しばらく正一はそこから動くことができなかつた。

### 第三話

深夜。

阿守邸は恐慌状態に陥っていた。

先程滓鬼討伐の任から戻った　否、搬送されてきた正一の報告によつて。

比良坂黄泉がこの街に戻ってきた。

その報は、彼女を知る者にとつて激甚な衝撃を与えた。特に、阿守の当主であるこの彼にとっては。

「なぜ、どうして、何で戻ってきたのだ、あの女は……っ」

忌々しげに畳を殴りつけて悲憤慷慨するは当主、阿守一心あもりいっしんである。だが、懊惱あうのうしているのは何も彼だけではない。この場に同席している者らもまた、皆一様に頭を抱えていた。

その理由は一つ。彼らこそが、一〇年前、黄泉を追放した張本人たちであるから。

もう死んだと思つていた。会うことはないと思つていた。

なのにどうして、帰つてきてしまつたのか。彼女を求めている存在など、世に一人としていないというのに。

「あれの目的は何だ？　我らへの復讐か……？」

一心が誰に言うでもなく訊ねる。が、それに答える者は誰もいない。いや、これはある意味返答しているとと言えるのか。この沈黙は、すなわちその問いを肯定したくないがためなのだから。

そのことは当然一心も察している。事実正一は半殺しにされているのだ、これで疑わぬ者がいるのだとしたら、その者は現実を見れぬただの愚物である。

そしてむろん、一心はそのような患者ではない。何しろ彼は阿守の当主。人一倍聡くなければ皆を先導することなどではしないのだ。

しかし、それゆえに問題は起きる。

「謎の魔術師に加え、黄泉までもが我らを滅ぼしに来た、か。強大な二者に同時に狙われようとは、もはや我ら阿守もここまでかもしれんな……」

「一心様……」

氣遣いの言葉は、しかし紡がれることはなかった。彼らも分かっているのだ。己れらが辿る結末を。終焉が近いということ。

「やはり……あれを迎え入れたのは間違いであったか……」

嘆くように、呻くように、一心が呟く。

皆の脳裏に等しく映し出されたのは、一人の少女の姿。否 死 神の姿だ。

あれは異常に過ぎる。在ってはならないものだった。そうと知っていれば、迎え入れようなどとは思わなかったものを。けれど当時はそのことを知る由などなかった。ゆえにこの結末は当然の帰結。たとえ何度やり直そうとも変えることなどできはしない。

重苦しい空気が室内に満ちる。すでに皆諦念しているかのように、ただ黙して終わりを受け入れようとしていた。しかしそれもむべなるかな。敵が殺人鬼たる魔術師一人だけならばまだしも、そこにもう一人強大な敵が現れたのだ。しかもこちらは半端にその恐ろしさを知っているがゆえに絶望の根は深い。戦う前から諦めてしまっほどこに。

しかし、そんな時である。

「我々に討伐の命をお与えください、当主！」

障子が勢いよく開くと同時、そんな勇ましい声が響いたのは。

「お前たち……」

そこにいたのは、阿守の若い術者たちだった。正一が半死半生の傷を負って帰ってきたことから、恐らくは並々ならぬ気配を感じ取って聞き耳を立てていたのだろう。我ながら何と愚かな失態か。血気盛んな若い衆にこの最悪の現況を悟られてしまっとは。

内心で己に罵声を飛ばす一心の胸中を知ってか知らずか、数人の若者らは何かを決意したかのように拳を強く握り締めて、もう一度。

「当主。我らがあの女を　比良坂黄泉を討つてきます。ですからどうか、諦めないでください。阿守に未来はあります。勝利はまだ追えます。我々は負けてなどいないっ」

「……………」

その若者たちの言葉に、阿守の柱たる一心らは揃って瞠目した。この場に集っている年配の者らとは違い、彼らは若いゆえに比良坂黄泉という死神の恐怖を知らない。だからこのような短絡的な発言が飛び出てくる。だが、同時にそれは光明でもあった。

黄泉のことを口々に知りもせず、打倒を謳う彼らは危険極まりないが、されど何もせず座して死を待つ一心よりはマシであろう。たとえ極小と言えど生き残りの確率に賭けている分、希望はある。

ああ、そうだ。そうなのだ。なぜに己はこつも恐れているのか  
一心は先までの慄き絶望していた自分を一蹴する。

比良坂黄泉が己れらよりも上などと、一体どうして思い込んでいたのか。

確かにあれの才は破格級だった。魔術の鍛錬を始めてほんの数日足らずで、すでに阿守の誰よりも強くなっていたのだ。それもまだ一〇にも満たない少女が。むろん、皆がプライドを砕かれ膝を折った。嘆かすにはいらなかった。ゆえに、一〇年経つたいまなどもはや比較対象にすらなりはしないだろう　そう思うのが当然で、事実皆そう思い込んでいたが、しかし。

そもそも鍛錬を怠<sup>おこ</sup>っていたとしたら、どうだろうか。他の誰かならばともかく、元々あの女は魔道を極める気など欠片もなく、そもそもその動機からしてただ言われたからやってみた、という何とも軽いものだったのだ。可能性は大いにあり得る。

もしそうだとすれば、彼女の腕は鈍り自分たちの力は当時の屈辱をバネに遥かに上がっていることになる。むろんそれでも一対一では敵わないだろうが、けれど多対一ならばあるいは

(勝機はある、か…………)

無意識に拳を握っていた。絶望に耐えているそれではなく、勝機

を見出した歓喜の証として。そしてそれは、他の者らにも伝播する。「当主。彼らの言う通りだ、我らはまだ何もしていない」

「ああ、このまま自ら負け犬になることもないでしょう。目にも物を見せてやるうではありませんか、あの死神に」

いつの間にか、皆の瞳に光が戻っていた。自信に満ち溢れていた頃の顔に。

ああ、これこそが『正義』を謳う阿守の魔術師だ。悪に屈してはならない。退いてはならない。人類に害為す存在は、疾く排除するそれが彼らの願望<sup>アルカナ</sup>。

ゆえに。

「よし ではお前たち、まずはあれの情報を集める。どこに住んでいるのか、日々何をしているのか、そしていつこの街に戻ってきたのか。それらの情報を元に検証し、我らへの復讐を画策していると決が出た場合は……」

殺ると、口には出さず目で一心は皆にそう言った。

すでにこの場にいる者は全員比良坂黄泉を敵と見做している。いまままで何の成果も挙げられなかった一連の事件とは対照的に、此度のそれは明確な容疑者が浮上しているのだ。いや、あるいは連続殺人の犯人ももしかしたら黄泉かもしれない。というより、その可能性の方が高いだろう。これまでの犯行は阿守に対する挑発、および攪乱<sup>かくらん</sup>。敵が二人いる可能性をこちらに持たせ、常に己れ以外の姿無きの意識を向けさせ精神を乱す卑劣な戦法。ああ、彼女ならば十分考えつきそうな小賢しい手と言えよう。

だが、それも含めてまずは情報収集が先だ。彼女がどこにいるのか、これを知ることが何よりも肝要。真正面から向かって勝てないのであれば、最悪多少の犠牲を覚悟で家ごと爆破することも厭<sup>いと</sup>われない。

むろんその手はできる限り使いたくないが、けれど彼女一人生活だけで何百何千という死者が生まれるのだ、それを回避できるのなら、幾人かの犠牲はやむを得ないと言えるだろう。

そんな諸々の意を察した阿守の術者たちは、やがて静かに首肯して立ち上がり、部屋を後にした。

すでに戦いは始まっている。不安はある。恐怖もある。けれども退けない。退いてはいけないのだ。ならばあとは進むだけ。勝利に向かって、走り続けるしかない。

「……………」

不意に、一心は窓の外から見える街景色を見やり、

「この景色も……………見収めかもしれないな」

そう、寂寥さびしやうを含んだ声音で呟いた。

## 第四話

そこは 地獄だった。

凄絶な呵責に喘ぐ男の、女の、老人の、幼子の声が幽暗の闇に間断なく木霊する。それはまさに怨嗟と嘆きに満ちた死の旋律。それを、『彼』はお気に入りのお曲でも聴いているかのように心地良さを、そうに悦楽の笑みを浮かべていた。

一筋の光も届かぬ無明の深淵。まさに伏魔殿と呼ぶべきその暗黒の中に住まう『彼』が座するは、人の肉と骨とで構築された死の玉座。常人ならばそれに触れただけで滲み出る憤怒と慟哭の念に意識を塗り潰されるが、しかし『彼』にとっては己を飾る装飾品程度でしかなかった。

金糸のように輝く鮮やかな長髪。見る者を虜にする艶やかな碧色の双眸は、けれどどこか言い知れぬ狂気を秘めており、隙無く造り込まれた完璧なる容姿の造形が『彼』の不気味さにさらに拍車をかけている。

そんな『彼』の眼下では、いままさに人間から魔性への変生が行われていた。

髪が一本残らず抜け落ち、肌は爛れ、各器官は膨張と収縮を繰り返す。その痛みたるや筆舌に尽くし難く、まともな人間ならば数分と経たず壊れてしまっただろう。

事実、ここに自己を保っている人間は一人として存在しない。元は人間として生きていた者らは、けれど『彼』の邪法に染められ全く別の存在へと変わり果てていた。

これこそが魔術師としての『彼』 イモータルの使い魔創生術である。

行方不明として取り上げられている者らは皆ここへ連れて来られ、このような悪辣にして陰惨な実験体として扱われていたのだ。

肉体強度を極限まで高めていき、その過程で生じる激甚な痛みでもって精神を擦り潰し、己が魔術を深層意識の底まで浸透させる。それはもはや悪魔の所業。人の尊厳を剥奪する外道の為せる業であった。

「甘美だ。だが足りん。もっと哭けよ貴様ら、所詮それしかできん屑であるがよ」

壊れたように体を痙攣させる男を蹴飛ばし、嗚咽を洩らす女を踏みつける。彼には他者に対する情など微塵もない。己以外の生物は全て卑賤なる屑と認識している。ゆえ、老若男女の区別なく、平等に己が悦のためにその命を奪い消費させるのだ。

まさに悪魔のような　その表現が正しく符合する存在が彼であった。

イモータルはいまし方変生した魔性をざっと見渡し、

「ふむ……此度生まれたのは滓鬼のみか。他は全て失敗　使えんな、実に」

呆れ果てたように切り捨てた。

何の価値もない無為な生を送り、ただ死んでいく人間共。だが彼らは己が生に何かしらの意味を求めている。ゆえにイモータルはその意味をくれてやった。世界に愛された至高の存在である自分その無聊を紛らわせる玩具としての意味を。

だというのに、その玩具にすらなれぬ塵が存在した。存在し、その者らを視界に収めてしまった。実に不快であること甚だしい。

「塵が。ならば最初から喋るな、動くな、疾く失せる」

すると、その言葉を合図としたかのように、地から無数の妖魔が這い出し、一斉に彼の玩具となり切れなかった塵へ襲いかかった。

絶叫が迸る。剥き出しとなった神経のまま、彼らは爪と牙を突き立てられているのだ。その痛みたるや人の許容を遥かに超えている。耐えられるはずもない。

やがて悲鳴が小さく、掠れるようにして消えていく。だがイモ―

タルの意識はもはやそちらには向いていなかった。捨て終えた塵に  
関心を持つ者などいないだろう。それと同じ。

と、その時。

「ただいま戻りました、ご主人様」

不意に、この狂気に塗れた空間にはそぐわない軽やかな少女の声  
が響いた。

やおらイモータルがそちらに視線を放ると、そこには一人の少女  
がいつの間にか立っていた。年の程は一四、五辺り。黒い豪華なド  
レスに、長い赤髪を左右で結った髪型が特徴的な見目麗しい美少女  
である。

彼女を視認したイモータルは、その尊大に過ぎる瞳をほんのわず  
かに緩ませて。

「ああ、よく戻ったな、我が片腕エリザベス。して、獲物の食いつ  
きは如何に？」

「上々　と言いたいところですが、どうやら一緒に異物まで釣つ  
てしまったようです」

「異物？」

「はい。魔術師ではあるようでしたが、どうということのないただ  
の女です。如何致しますか？」

彼女は滓鬼を統率する権利を与えられた、言わばイモータルの代  
行の役を担っている。ゆえに街に放たれているあれらの指揮を取っ  
ているのは彼女なのだ。それはすなわち、一連の連続殺人を行うよ  
う滓鬼に命を出しているのはこの少女であるということ。もっとも  
そうするようエリザベスに指示を出しているのは主君たるイモータ  
ルなのだ。

ともあれ、そのことから彼女は滓鬼が見聞きした全ての情報を得  
ているのだ。当然阿守の動きも、そして絡んできた死神いらいのことも把  
握している。ゆえに問題は、後者の処理をどうするか、というもの。

殺すことは前提。その後、滓鬼とするかただの塵として廃棄するか エリザベスがイモータルに訊ねているのは、すなわちそれである。

己が片腕たる彼女にその意を問われたイモータルは、数秒ほど目を閉じて黙考し、そして。

「よし。ではその女の正体を探れ、エリザベス。結果下らぬ屑であったのならその場で処分、マシな玩具であれば」

「泳がせろ、ですか？」

ああ、とイモータルが首肯する。

しかし、なぜわざわざそんな面倒なことをするのか。邪魔ならば殺せばいいし、手足として欲しいのならばすぐにでもその指示を超越せばいいものを。一体どうして、こんな回りくどいやり方を選んだのか そんなエリザベスの胸中を読んだのか、イモータルは不敵な笑みを浮かべて。

「ここしばらく同じことの繰り返しでな、少々鬱屈していたのだ。見てみよ、この醜穢な塵共を。なぜ、こやつらはお前のようにいかなのかな。甚だ謎だ そう思っただけでしばらく実験を続けていたのだが、それもいささか食傷気味でな。飽いてしまった。ならばこの無聊、どう慰めれば良い？」

「……玩具、ですか？」

「ああ。たまには見戯も良からう？ 特に、己れが至上であると思いつくつと喉を鳴らし、陰惨な笑みを浮かべるイモータル。彼は

他の誰をも認めていない。己れに比するは世界のみ。それ以外の遍く（あまね）全ては取るに足らぬ屑である。

それが魔術師・イモータルの価値観。

傲慢に過ぎるその思想、けれど虚仮ではない。彼はその尊大な性根に見合うだけの実力を有している。それが証拠に、彼がこの世界に生を受けてからの三〇〇年、未だただの一度も敗れたことがない。そしてそれは恐らく、これからも。

「……ふむ。よし。ではこれを機に少し趣向を変えてみるとうしようか」

不意にそう言って、やおらイモータルは指を鳴らした。

するとそれが合図だったのか、闇の空が突如二つに割れ、そのまま暗黒の空間は捲られるようにして一瞬の内に何の変哲もないビルの屋上風景へと転変した。

そう。つい先程まで彼がいた場所は、イモータル自身が魔術によって編んだ結界の中だったのだ。ゆえにこれまで何者にも見つけれることがなかった。何せ位相のズレた空間はもはや？異界？と何ら変わらないものなのだから、霊視力のない一般人ではまず見つけれまい。

イモータルはおもむろにいまし方生誕したばかりの滓鬼に視線を投げ、

「行けよ貴様ら。その内に秘めし赫怒、存分に撒き散らしてくるがいい」

血の雨を降らせよと、そう指示を下した。

彼の本来の獲物は名も知らぬ女魔術師ではなく、この地を守護せんとする道化共。所詮件の女などおまけ、余興に過ぎない。

ゆえにこれは、その道化共　正義を謳う魔術師共を破滅へと誘う一手。彼らが世の安寧を願っているのなら、必ず乗ってくるだろう。いや、そうせずにはいられないはず。

であるからこそ、彼は願うのだ。どうか貴様ら、容易く死んでくれるなど。久々の遊興、可能な限り楽しみたいと思うその感情は彼にもあるから。

だから

「楽しませろよ玩具共。わずかでも興を削ぐような真似をすれば、死より重い刑に処す」

四方八方へ飛び去る滓鬼を見下しながら、凄絶な狂気を宿した言葉を紡ぐ。

それは星のない暗天の夜の出来事。

その無明の闇を切り裂くように、蹂躪<sup>じゆうりん</sup>するようには、数多の悪鬼羅刹<sup>グラシキニョル</sup>は百鬼夜行の如く進軍し、これより始まる恐怖劇<sup>グラシキニョル</sup>の幕開けを告げた。

## 第五話

凶報が届いたのは陽が昇った直後辺り。

それまで判然としなかつた思考は、けれどその報を耳にした途端に覚醒した。だが、叶うならば覚醒などしなくてもらいたかつた、というのが彼女の本音。これが寝ぼけた己の聞き間違いであつたら、どれだけ幸福だつたかと、数時間経つたいま現在でもそう思わずにはいられない。

ひりょうかみ 比良坂黄泉が帰ってきた。

それが報の内容。

まだ二〇歳にも達していない小娘の帰参報告は、けれどその道を行く者にとつては激甚な災禍の到来にも等しい。ゆえにできることと言えば、その災害に己が巻き込まれないことを祈るか、あるいは被害圏外へ逃げるかのどちらかだろう。それが当然の選択であり、正しい回答である。ならば、そのどちらでもない第三の回答 たとえばその災禍に欣喜雀躍きんきじやくやくして特攻、などという選択はどうだろうか。

ああ、言うまでもない。ただのバカだ。

彼女 くきつかかなえ 九季塚奏恵の目前には、それがいる。

「あなた……死ぬわよ？」

もうこの警告も何度口にしたことだろう。そろそろ一〇に達しているのではあるまいか。そして、この返答もまた変わりなく。

「うるせえな。どうしようがオレの自由だろ？ っつか、勝手に殺さねえでくんねえかな」

鬱陶しげにそう言ったのは、赤い薄手のコートと右頬に同色のトライバルタトゥーを施したチンピラ風の少年。年は一八、九くらいけれどその若さに反して髪は色素が完全に抜けた白髪であり、それが彼の派手な外見を奇異なものにしていた。

さて。そんな一風変わった出で立ちの彼はいま外出の支度をしており、後は靴を履くだけという状況。それを引き止めているのは奏恵である。彼からすれば鬱陶しいこと甚だしいのだろうが、一方の奏恵からすれば断崖に向かつて駆ける知人を止めるのは至極当然の道理であり、糾弾される謂れなどない。

ゆえ、玄関にて靴を履こうとする遊路に、彼女は。

「そうは言うけど、客観的見地からするとそうなるのよ。いくらあなたが強いからって、あの死神に勝てるとは思えないわ」

死神 件の少女はそう呼ばれていた。

情報提供してくれた阿守あもりの術者たちに ではない。世界中に存在する魔術師たちに、だ。  
争ってはならない。近づいてはならない。触れてはならない。

あれは忌避すべき存在。人類ひとの禁忌、その具現。

それが、彼女に対する魔術師及びその世界に在る者らにとっての共通認識だった。だからこそ奏恵はこうも懸命に彼を引き止めようとしているのだ。

しかし、それに遊路は呆れたように。

「負けねえし死なねえし。つつかよオ、奏恵。お前 何か勘違いしてね？」

「え？」

言われ、キョトンとする奏恵。勘違いとはどういうことなのか。

そんな彼女に、遊路はため息を一つ零して。

「オレがいつ死神さんとこ行くつつたよ？ 勝手に決めつけんなつての」

「え……それじゃあ何、あなた死神の所へ行かないってこと？」

「おー。あいつとは、会える時が来たら会えんだらうからな」  
「……？」

言っている意味はよく分からなかったが、しかし兎にも角にも彼が死神の下へ行かないというのは本当だろう。この手の嘘は言わない男である。ゆえにそのことについては安堵したが、けれどだとす

るなら新たな疑問が浮上してくる。

彼は一体どこへ行くつもりなのだろうか。

その奏恵の疑念を察したのか、靴を履き終えた遊路はすつくと立ち上がった。

「ンじゃ、ちよつとお山の大将に挨拶してくるぜ」

それだけ言って、さっさと出て行ってしまった。

「お山の大将……？」

残された奏恵は、遊路の言を反芻して思考する。それが一体何のことを 誰のことを指しているのかと。

その答えは、一つしかなかった。

「ちよつと、まさかあの子……っ」

咄嗟にドアを開け、遊路を呼び止めようとする奏恵。だが そこにはもう、彼の姿はどこにも見当たらなかった。

それから程なくして、奏恵は阿守から連絡を受け屋敷に参じていた。

彼女は情報屋という職業柄、阿守とは浅からぬ付き合いを持っているのだ。ゆえに、此度呼び出されたその理由もおおよそ察しがつく。

（死神の情報を収集しろ、ってところかしらね……）

つい昨日までは街で無法を繰り返す魔術師の正体、及びその潜伏場所を調べると依頼していたが、しかし彼らにとって最優先事項は死神に関する情報を得ることだろう。魔術師のことなど二の次。半端に知っている死神の方が、余程脅威に思えるに違いない。

だが、それは彼女とて同じなのだ。情報屋として死神の話は痛いほど耳にしている。正直、如何に金を積まれようと関わろうとは思っていない。の、だが……

（そうもいかないわよね……）

世界的にもその名を馳せている魔術の名家、《阿守》の存亡が懸かっているこの状況で依頼を蹴つてしまえば、もう己は終わりだ。二度とこの界限で生きてはいけぬだろう。

だから、仕方がない　そう門前で諦念のため息を吐き、奏恵は中へと入って行った。

屋敷は戦国時代からそのまま時を越えてきたかのような、和風建築の広大な面積を持つ武家屋敷。何と見事な荘厳な造りだが、けれど屋敷の装飾たる坪庭もまた負けていない。手入れの行き届いた庭を彩る草木は風に撫でられているかのように柔らかに葉を揺らし、汚れを知らぬ澄んだ池の中の鯉は舞踏でも披露しているかの如く優雅な泳ぎを見せている。ああ、何度見ても壮麗にして典雅な情景だ。だが、それも異物が混ざれば途端に失せてしまう。

庭の至る所に配置されている、阿守の術者たち。その一人一人が余裕のない恐怖の焦慮や殺意の憎悪を秘めた目で付近を見渡している。いつどのタイミングで敵が侵入してきても即座に迎撃せんと、哨戒しゆかいしているのだ。元凶たる魔術師を想定してではない。彼らが追出した死神が報復してくると仮定した上での対策なのだろう。このことから、如何に阿守の者らが彼女を意識しているのかが窺える。と、従者に連れられてうぐいす張りの廊下を行きながら奏恵がそんなことを思っている間に、当主が待つ座敷へと到着した。

案内してくれた従者に礼を言い、障子を開けて中に入る。するとそこには骨の上に皮を被せ、和服を着せただけの病的に痩せ細った老年の男が一人座していた。ああ、言うまでもないだろう。彼こそが阿守一族の当主、一心である。

「よく来てくれたな。まあ、座ってくれ」

「失礼しますわ、当主」

言われ、奏恵は一心の対面に腰を下ろした。禿頭に髑髏むくろのような面相。会う度に骨に近づいているような印象を与える彼だが、しかしその深い眼窩がんかの奥にある両の瞳には、何か執念にも似た凄烈な光

を宿らせている。前回会った時とはまるで別人だ。

と、しばしの沈黙を挟んだ後、不意に一心が口を開いた。

「お前さんをここに呼んだのは他でもない。以前依頼していた魔術師についてなのだが……」

「え？」

「何だ？」

「あ、いえ……何でもありませんわ」

こほん、と咳払いをする。

予想していた話とは違ったため、少し取り乱してしまったのだが、これが奏恵にとって僥倖<sup>じやうじやう</sup>。てつきりあの死神の身辺を探れと新たに依頼されるものとはばかり思っていたのだが、それがただの結果報告だと言う。途端に気が楽になるのも当然と言えよう。

奏恵は気を取り直し、改めて一心の問いに答えた。

「ご依頼されていた魔術師の潜伏場所についてならば、もう特定してありますが」

「ほう？ それは本当か？」

「はい。昨夜遊路が 協力者が突き止めてくれました。場所は街一番の高層ビル、『ゴスペル』。その屋上に件の魔術師は重層結界を張って潜伏しています」

これは遊路が昼夜問わず街中を駆け回って掻き集めてくれた情報だ。まず間違いないと見ていい。

彼の気性からすれば、発見した瞬間に攻撃を仕掛けても不思議ではないのだが、それをしなかった辺り、相手を相当の実力者と見ているのだろう。いや あるいは攻撃しなかったのではなく、できなかったのかも。どちらにしても、一筋縄ではいかなそうな相手である。

「福音<sup>ゴスペル</sup>……ふん、何とも皮肉な名のビルを根城としたものだな」

忌々しげに一心が吐き捨てる。それに奏恵はわずかに苦笑しながら、

「ええ、本当に。それで、次の一手はどうなさるのですか？」

望むなら如何なる助勢も惜しみませんが」

それは嘘だ。奏恵の本心は、己れと遊路がこの件から外れることを願っている。先に調べていた魔術師を討伐するためとのことならば致し方ないが、死神に関することなら全てが却下だ。特に打倒のための助勢は絶対に。

そんな奏恵に、一心は。

「では、お言葉に甘えようかな。この苦境を乗り切るためにどうか、我々に力を貸してもらいたい」

深く、畳に額が触れる寸前まで頭を下げて懇願してきた。

一族の主にここまでされて、その頼みを無下にする事などできはしない。それにそもそも、如何なる助勢も厭わないと宣言しているのだ、ここは快く受け入れる他ないだろう。

「承知しました。些少ですが、この身の持てる全ての力をお貸します」

渾身の作り笑顔を浮かべて、奏恵は未だ頭を垂れている一心を優しく起こしてやる。こうなってしまうてはもう仕方がない。いま言った言葉通り、持てる全ての力を使って彼らに協力するしか。

問題は、阿守がどちらの敵に焦点を当てているか、それなのだが……

と、そんな奏恵の心中を察したかのように、一心は言った。

「では、腕に自信のある魔術師を可能な限り集めてくれ。今夜にでもあれを　比良坂黄泉を討伐しに行く」

「……分かりました」

一瞬息を呑み込んで、奏恵は頷いた。

ああ、こうなるだろうとは思っていた。どれだけ拒絶の意を持つとも、抗うことはできないと。

一度関わってしまった以上義は通さねばならない。たとえどれほど危険であろうと、否、危険であるからこそ、貫かねばならないのだ。でなければ、いよいよとなればあいつは依頼主を見捨てて逃げる下種だ、との噂が広まりかねない。そしてそうならもうこの

業界で生きていくことは不可能。引退する他なくなる。

最初から死神が関わっていると知っていたならば、初期の段階で断っていたものを。

奏恵は己が運命に悲憤しながらも、現状を受け入れ、いくつか質疑した。

「それで、彼女の情報はどの程度集まっているのですか？ 話では、昨夜正一さんと交戦したとか」

「ああ……手酷くやられたようだ。外傷はないんだが、精神の方がな……」

一心の表情が酷く陰る。正一とは奏恵も当然面識があつたゆえ知っているが、その実力はかなりのものだったと記憶している。少なくともどんな相手であろうと一矢報いることくらいはできる程度には。だが、一心の口振りからしてそれも叶わなかつた様子。しかし、それに対して奏恵は意外にも驚きはしなかつた。だがその理由も瞭然だろう。何せ件の死神は尋常の埒外にいる存在であると彼女は知っていたのだから、如何に強いと言っても凡夫の域を出ない正一では敵うはずもないだろう。むしろ殺されなかつたことこそ驚くべき事象である。

「そうですね。では住居の方は？」

「割り出しておるよ。いま若い衆 敬他けいたと陽介よっすけを張り込ませている。あれに何か動きがあれば、すぐにでも連絡が入る手筈となっている」

一市民の住所を見つけることくらい、そう難しいことではない。

特に警察や役所に顔が利く阿守ならばさらに容易だったことだろう。

だが。

「……当主」

「分かつとるさ。手は出さないよう言い聞かせてある。決行は今夜なのだ、無理をして切り込もうなどとあれらも思つまい」

「だといいですけどね」

人の感情に理屈など通用しない。それがまだ二〇歳そこらの若者

であるのなら、なおさらに。

(嫌な予感がするわね……)

もつすでに最悪の状況に立たされているにも拘わらずなおもそう思ってしまうのは、やはり彼が原因だろう。

久我遊路。

恐らくは世界でもっとも待機が苦手な少年。事あるごとに危険を求めて奔走する異常に過ぎる性を持った彼は、ゆえにいま当初からの玩具ターゲットであった魔術師の下へ向かっている。奇しくも阿守が死神討伐を決行するその日に、だ。

たとえこの強大な二者に因果関係がなかったとしても、奏恵が不安に思うのは自然と言えるだろう。

だが、彼女はその懸念すべき事態を一心に伝えることはしなかった。無意味と判じたからである。いや、それどころかこの情報はマイン要素と言えよう。いま彼らは比良坂黄泉というただ一人の敵に全意識を向けている。その団結を崩してはならず、また万分の一以下だとしても、彼の死神に勝利するには強い結束が絶対不可欠。ゆえに、いまは余計なことは口にしない方がいいだろうと、奏恵は思ったのだ。

そして、だからこそ、願う。

(せめて今夜だけでも、大人しくしててちょうだいね……)

果たしてその祈りは彼に届いたのか。

奏恵がその結果を知るのは、これより三時間後 悪鬼羅刹が活

動を始める、逢魔が時であった。

## 第六話

奏恵に多大な憂慮を与えている彼、久我遊路は、現在繁華街にいた。

春休みシーズンゆえか、街には比較的若者が多い。今年こそは彼女を作るだとか、同じクラスだったらしいなとか、受験勉強がどうだとか。何とも気の抜けるような他愛のない話をそこかしこでしている。鬱陶しいことこの上ない。

だがまあ、その雑音も程なく消えることになるだろう。そう遊路は確信していた。

玩具タイゲットの位置は把握している。問題はそこから移動していないかどうか。しかしそれも恐らくは大丈夫だろう。発見したのはつい昨夜のことなのだから、余程運が悪くない限り根城はあそのままだ。

ゆえに、懸念すべきは敵の魔術ちから。街に跳梁しやうりやうしている滓鬼の強さが通常のそれとは比較にならないことは、すでに阿守から奏恵経由で情報を得ている。使い魔の力が高ければ、必然それを従えている主の力が強大であることは明瞭。ゆえに刹那の油断も実力の多寡たかを読み誤ることも許されない。もしそんな愚を犯したならば、その時点で己は死するだろう。此度の敵はそれほどの大物だと彼は読んでいる。

にも拘わらず、遊路はそれに歓喜し、そして期待していた。実際は如何ほどなのかと。

動物と人の違いは何なのか。それは無聊するか否かだろう。退屈は人を殺す。肉体的ではなく、精神的に。

すなわち生の実感の剥奪。

動物や植物はただ生きるのみだが、人はなまじ知能がある分何らかの手段によってそれを得なければ生を苦と感じてしまう生き物なのだ。言うなれば欠陥。その空隙を人は娯楽たのしみによって埋め、生きている。ならば、その穴を埋めるための手段とは、皆等しいだろうか。

？

答えは否。千差万別だ。

だが、だとしても大概は平凡なものだろう。たとえば美味しい飯を食うとか、スポーツをするとか、友人と下らない話をするとか、恋愛とか。それこそ列挙すればキリがない。

しかし、彼のそれはそのような平凡にして平和な域から逸脱したものだ。つ

つまり、殺し合い。

生きるか死ぬかの瀬戸際、死線の中でのみ彼は己が生を実感し、世に自分という個が在ると認識できる。だからこそ、追い求めるのだ。

死を。

ゆえに、久我遊路は己を殺せない者になど興味はない。逆に言えば、全力を出しても勝てるかどうか分からない危険極まりない相手であればあるほど、彼は歓喜するということ。ああ、まさに狂人を絵に描いたような人間と言えるだろう。

さて、そんな異常に過ぎる彼が向かっている先はというと……

「とーちやく、つてな」

足を止め、己が視界に入り切らないほど巨大なそれを見上げる。

高さ二〇〇メートル強の、御門市最長高層ビル 『ゴスペル』。

一体どのような理由でこんなバカみたいに高い建造物が建てられたのか、その内情は知らないし興味もないのでどうでもいい。彼がここに来た理由は、このビルに関心があったからではなく、このビルに住まう輩に用があったから。

昨夜は発見するも突入することが叶わず、無様にも引き下がる八メになってしまったが、今回はそうはいかない。

「キツチリとそのツラ、拝ませてもらっぜ」

遊路は不敵に嘯き、行動を開始した。

ビル内に響き渡る火災警報。

それは正午過ぎの気だるさと眠気に苦しみながらも仕事をこなしていた彼らの平穩を完膚なきまでに粉碎し、一瞬にして間断ない悲鳴が木霊する非日常へと瞬転させた。

恐慌状態となった社員らは我先にと周りの人間を押し払いながら無我夢中で出口へと駆け込んでいく。結果一階口ビ―は数多の人間によって犇めき、混乱の態を為していた。

一〇数分ほど経った頃、ようやく皆が避難を無事終えられた。外に逃げ出た者らは不安と焦燥の面持ちでビルを見つめ、消防隊の到着を待っている。その様子を、彼はビルの中から眺めていた。

「おし。あらかた出払ったみてえだな」

嬉々とした声で遊路が呟く。言わずもがな、火災警報器を鳴らしたのは彼である。それを為した理由は、ビル内の人間が邪魔だったから、というだけ。常識という観点から見れば傍迷惑極まりない行為だが、むろん彼には罪悪感などない。むしろ一掃除終わったばかりに、清々しい気持ちになっていた。

さて。そうして事を終えた遊路は、階段を使って エレベーターは止まっているので 屋上まで行き、そこで煙草を口に銜えて火を点ける。次いで事前に購入していた市販用の打ち上げ花火複数個を懐から取り出し、煙草の火で導火線に点火。そしてそれをコンクリートの地面に設置し、離れる。

直後。

間の抜けた音を発して花火は天へと昇っていき、無事昼の青い空の下で咲いた。

それを見て、遊路は。

「やっぱ市販のはちんけだな。強力って書いてあんなのにこんなモンかよ。もっと派手なの予想してたぜ」

騙された、とため息を一つ零す。彼は何をするにしても派手さを求めるといふ、少し困った性質を持っていた。ゆえに、いま市販用の花火の矮小さに落胆しているのである。

「けどまあ、これでもノック代わりにはなるわな。今回はそれでい

いか」

たとえばの話。

家のすぐ近くから、突然大きな音が聞こえたら人はどのような行動を取るだろうか？ ああ、恐らくは多くの者が何かと気になって外に出るまではせずとも、窓から顔を出すぐらいのことはするのではあるまいか。

しかし、いまこのビルには誰もいない。彼がそうなるよう仕向けたのだから当然だ。では、この花火の意図するところは何か。

簡単な話。いま彼が言ったように、これはノック。呼び鈴のようなものでしかない。

つまり

と、その瞬間。突如としてビルの屋上、その中心辺りの空間が歪み始めた。

あり得ない光景。信じられない事態。しかしそれは一般人の反応<sup>シヤウシヤウ</sup>。まともから程遠い位置に在る彼は、ゆえにこの状況にもまるで吃驚<sup>シヤウシヤウ</sup>の様子を見せない。それはこれが彼の思惑通りの展開であるから。そうして、やがて歪んだ空間に黒い穴が生じ、そこから一人の青年が現れた。

黒いローブに身を包み、貴族然とした秀麗なる美貌と暗闇のような不気味さを醸し出す謎の男。その彼に、遊路は臆することも様子を窺うことすらせず、懐から大口径の回転式拳銃<sup>リボルバー</sup>を抜き。

「チーッス、お届けモンです」

一切の躊躇なく、頭部目がけて全弾発砲した。

晴天の下に轟く銃声。

それが凄惨なる戦の、その開戦の狼煙となった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9109y/>

---

幻想のアルカナ

2012年1月6日18時56分発行